

田辺聖子『新源氏物語』の方法：  
田辺家寄託資料「序章・桐壺」の分析による

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000119">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000119</a>

# 田辺聖子『新源氏物語』の方法

— 田辺家寄託資料「序章・桐壺」の分析による —

中 周 子

## (一) はじめに 近現代作家と『源氏物語』

『源氏物語』は世界中で翻訳されて読み継がれ、何度も映画化され、舞台化され、漫画化され続けている希有な古典作品である。そのように、『源氏物語』が千年以上の時空を超えて長い生命を保ち続けているのは、原作の魅力によるのみならず、各時代において様々な作家たちが翻訳・翻案することで原作に新たな息吹を吹き込んでいることにもよっているとさえいう。日本古典文学の中で、『源氏物語』ほど、作家による様々な翻訳・翻案が行われている作品はないからである。しかも、大胆な原作離れの作品、二次創作も盛んに生まれている。

『源氏物語』の最初の全巻口語訳として知られるのが与謝野晶子の『新訳源氏物語』である。その後、谷崎潤一郎、円地文子、田辺聖子、瀬戸内寂聴、尾崎左永子、大塚ひかり、林望、荻原規子、千

草子、近年の角田光代にいたるまで陸続と出版されている『源氏物語』全巻の翻訳や翻案は、作家名を冠して「〱訳」と称され、「現代語訳」と呼ばれることが多い。

作家による多様な翻訳・翻案作品を「現代語訳」と括る傾向について、立石和弘氏は、「〱訳」とラベリングするあり方<sup>1)</sup>を読者の側から分析する。「原文を読み通すには負担が大きい。かといって梗概書で内容を“知る”だけでは飽きたらぬ。そうした読者が『源氏物語』を“読む”実感を求めて手に取る」のが、いわゆる「現代語訳」だという。そのような読者にとっては、個別の作家の作品であるという事実よりも、「現代語で『源氏物語』を読んだという了解」が重要なだと分析する。

作家の側から見れば、例えば、与謝野晶子は『新訳源氏物語』を「自由訳<sup>2)</sup>」と説明している。原文を省略したり、原文にない説明を加えたり、原典の和歌を異なる歌に改作したりしている。現代語訳の嚆矢という評価が定着しているが、巻によっては、翻案と呼ぶべ

き巻もある。また、谷崎潤一郎は最初の訳業において、光源氏と藤壺の恋愛に関する記述等を天皇への不敬と批判されることを憚って「全體の物語の發展には殆ど影響がない」として削除したり書き換えたりしている。

田辺聖子は『新源氏物語』の執筆を「逐語訳的な現代語化でもなく、原典の雰囲気をそのまま伝えつつ、現代小説としてよみがえらせるという作業」だと述べている。また、『源氏物語』を私が口語訳するときの最大のたのしみは、「二つあった」「不壊の白珠ともいうべき原典をうんと噛みくだき、その美しき細片を、ひろく敷きつめ、ちりばめてしまふ、そういう『私訳』もあっていいのではないかと思う」など「口語訳」や「私訳」とも述べている。

詳細に読めば、それぞれの作家ごとに異なる作品世界を創造しているのであるが、そのなかでも、田辺聖子の『新源氏物語』のユニークさは画期的である。その獨創性については、かつて和歌の翻訳を巡って考察したことがあるが、本稿では、新たに見出された資料の分析によって『新源氏物語』の成立過程と創作方法を考察したい。

## (一) 『新源氏物語』の冒頭

周知のごとく『源氏物語』の首巻・桐壺は次の一文で始まる。<sup>①</sup>

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたま

ふありけり。

多くの妃たちが侍る宮中で、高い身分ではないが帝の寵愛を得て時めいていた桐壺更衣、光源氏の母の紹介で物語は始まる。そして、作家たちによる『源氏物語』翻訳はこの一文で始めることが常套になっている。しかし、田辺聖子は『新源氏物語』（以下、「新源氏」と略称する）を、次のように書き始めている。<sup>②</sup>

光源氏、光源氏と、世上の人々はことごとしいあだ名をつけ、浮わついた色このみの公達、とめてはやすのを、当の源氏自身はあじけないことに思っている。

「新源氏」の初出は『週刊朝日』（一九七四年一月八日号）一九七八年一月二七日号に連載）である。すでに、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子の名だたる翻訳があった。しかし、連載開始当初、この冒頭が驚きをもって読まれたことは想像に難くない。後に、田辺聖子の「新源氏」は『源氏物語』翻訳史上のビッグバンと評価され、爾後、原典離れの著しい翻案が続出した。

例えば、橋本治『窠変源氏物語』（一九九三年完結、中央公論社刊）は、光源氏の視点で語られる獨創的な翻案であり、もはや現代語訳と呼ばれることはないのだが、その冒頭においてさえ次のように、桐壺の冒頭の一文を強く意識して始めている。

いつのことだったか、もう忘れてしまった——。  
帝の後宮に女御更衣数多袴めくその中に、そう上等という身分ではないが、抜きん出た寵を得て輝く女があった。

また、瀬戸内寂聴の『女人源氏物語』（一九八八年一月、小学館刊）は、『源氏物語』に登場する女性たちの語りによって光源氏の恋物語を描いた完全な創作といえるが、「桐壺更衣のかたる・桐壺」で始めている。『源氏物語』は桐壺巻で始まるという事実が、『源氏物語』を題材とする創作においても踏襲されることが多い。

ところが、「新源氏」は「いづれの御時にか」という原典の冒頭で始めていないばかりか、首巻に「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」を置いている。桐壺と帚木の巻をとばし空蟬の巻から始めているのである。「新源氏」の独創性が再確認されよう。

「新源氏」の画期的な冒頭を考える上で、貴重な資料が存在する。本学の田辺聖子文学館に田辺家より寄託された資料「新源氏」自筆原稿と共に保管されていた、自筆原稿である。一枚目には「序章・桐壺」と記されている。「田辺」と印刷された専用の原稿用紙十一枚に鉛筆で書かれている。この原稿用紙（以下「田辺用箋」と呼ぶ）は、「新源氏」の執筆にも用いられている。因みに「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」は「田辺用箋」が用いられ、「藤のうら葉は色も褪せじの恋の巻」では「田辺用箋」と「田辺聖子用箋」が用いられている。「桐壺・序章」は「新源氏」前半に先立つ執筆であったと考えると矛盾はない。書入れや訂正箇所も少なく、ルビも付されて

いる。編集者に読ませることを前提にして書かれた原稿であったことが明らかである。

ただし、「新源氏」の各巻名が短文や語句により内容を示す題目であるのとは異なっている。また、後述するように「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」には桐壺巻の内容も組み込まれている。これらのことから、「序章・桐壺」は、「新源氏」の構成が決まり、本格的に執筆を開始する前の段階で書かれた原稿で、結果的に使われなかった原稿と考えられる。とはいえ、「新源氏」を構想する過程において、原典通り「桐壺」の巻から始めようかと試行錯誤したことを示唆する資料であり、「新源氏」の成立と創作過程を考える上で貴重な資料である。

### （三） 田辺家寄託資料「序章・桐壺」

「序章・桐壺」（約四四〇〇字）は原典の桐壺を三割程度の分量に縮約している。何を、どう省略したのか。まず、原文と「序章・桐壺」の内容を一覧表にして比較しておきたい。比較表の原文「桐壺」の内容は、『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社）の頭注に記す叙述内容を要約した小見出しを用いた。小見出しには数字を付け、必要と思われる小見出し以外の内容の要点にはアルファベットを付けた。「序章・桐壺」の内容項目には、原文の数字とアルファベットを付し、（ ）内に相違点を記した。なお、「序章・桐壺」の全文は翻字して後掲した。

『源氏物語』桐壺の内容	「序章・桐壺」の内容
1 主人公の母一時めく更衣の紹介 a 帝の寵愛 b 妃達の嫉妬 c 殿上人の非難 d 楊貴妃の事件に結びつく危惧	4 b 桐壺更衣 2 両親と家柄 1 数多の妃の競う後宮 4 a 容貌と気立て 1 a 帝の烈しい恋情 1 d 楊貴妃に例えた噂広まる b 妃たちの嫉妬の激しさ 4 c 妃たちの非道な仕打ち (更衣の言葉)
2 更衣の家柄	(前述)
3 主人公の誕生 a 一の宮よりも帝の愛情が深い	3 皇子の誕生
4 更衣の立場 a 「上衆めかしけれ」 b 桐壺の更衣 c 妃たちの非道な仕打ち	(前述)
5 若宮三歳、袴着を行う	5 盛大な袴着 妃たちの迫害が烈しくなる
6 更衣の死 a 更衣の容貌 b 宮中を退出 c 別れの和歌	6 b 御息所の病重くなり里に退出、逝去 (c 和歌は不記 最期を覚悟した御息所の言葉)
7 若宮、母の喪により里邸に退出	7 若宮、祖母の許で暮らす
8 更衣の葬送 a 三位追贈 b 人々、生前の美貌と欠点のない性格を偲ぶ	8 御息所の葬儀 (a 三位追贈は不記)
9 帝の悲しみ a 帝、若宮を案ずる	9 帝の悲しみ深まる 御息所の面影を偲ぶ a その母と若宮を案じる
1 0 野分の夕べ、靱負の命婦の弔問 a 帝の歌、b 命婦と更衣の母の贈答歌	1 0 靱負の命婦を慰問に遣わす (a b 和歌は不記)
1 1 命婦の復命と帝の新たな悲しみ a 更衣の母の返歌、b 帝の和歌二首	1 1 命婦の奏上 (a b 和歌は不記)
1 2 若宮参内、祖母北の方の死	1 2 祖母の死 若宮の参内
1 3 若宮のすぐれた才能	1 3 若宮の美貌と才能
1 4 高麗人の予言。若宮、臣籍に下り源氏の姓を賜る。	1 4 高麗の人相見の観相 若宮を臣籍に降下、源氏姓を名乗らす
1 5 藤壺の女御の入内 a 帝の寵愛	1 5 亡き更衣に似た先帝の女四宮藤壺の入内 a 帝の嘆きおさまる
1 6 源氏の君藤壺を慕い、二人ながら帝に寵愛される a 帝の藤壺への言葉 c 世人「光君」「かがやく日の宮」と呼ぶ	1 6 帝、藤壺と若宮を寵愛する a 帝の藤壺への言葉 (藤壺の若宮への思いと言葉) 1 6 源氏の藤壺への憧憬 c 「輝く日の宮」「光る君」と呼ばれる
1 7 源氏の君の元服	1 7 元服
1 8 源氏、左大臣の姫君と結婚 a 帝と左大臣との贈答	1 8 左大臣の姫君との婚儀 (a 和歌は不記)
1 9 左右の大臣家の勢力について a 右大臣子息、左大臣家の婿となる b 源氏は藤壺を理想の妻と思う c 「光君」は高麗人の命名	(1 9 と a は不記) b 源氏の心中に藤壺への思慕がつのる (c は不記)

全体の内容を項目にして原文と比較すると、原文に記された出来事、登場する人物と心情は、ほぼ網羅して書かれていることがわかる。もちろん、簡略化の程度に差があり、記述が前後することもあがるが、記された出来事の有無という点のみを比較すれば、「序章・桐壺」に全く書かれていないのは、6で亡き桐壺更衣に「三位追贈」が行われた件と、19で左大臣の子息が右大臣家の婿となった件、19c高麗人が光君と呼んだ件くらいである。また、原文に記述がなく、原文とは全く関わりない事柄について創作された箇所は極めて少なく、簡略な記述である。とはいえ、いずれも物語展開上に重要な箇所である。

例えば、原文では、桐壺更衣の言葉は、死の直前に宮中を退出する場面で詠じた一首の和歌と「いとかく思うたまへましかば」のたった一言である。ところが、「序章・桐壺」では、次のように原文には書かれない更衣の台詞を加筆している。

#### 【原文・桐壺】

朝夕の宮仕へにつけても、人の心をもみ動かし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

#### 【序章・桐壺】

おとなしい人柄の方なので、女人たちの暗黙の憎悪や嫉妬のは

むらに焼きたてられ、反駁もおできになれず、やつれていかれた。病がちに

「里へお帰し下さいまし……」

と涙ぐみながら訴えられるのが、かえって帝はふびんで、いとおしく、物狂おしいまでに恋心を募らせるのであった。

桐壺更衣は、帝から分不相応な寵愛を受けたために、嫉妬され無常な仕打ちに苦しむ。原文の「もの心細げに里がちなるを」という一節を、「里へお帰してくださいまし……」という更衣の台詞とすることで、更衣の苦しい心情を表すのである。また、原文では、危篤状態となり宮中を退出する場面で、更衣は次の歌を詠む。

#### 【原文・桐壺】

「限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり  
いとかく思うたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば……。

この更衣の和歌が会話に書き換えられているのである。

#### 【序章・桐壺】

「限りある人のいのちでございます……でも、あたくしは、生きとうございます」

と息もたえだえに、まだ言いたそうにいられるが、もはや

つづかない。

比較表に示しておいたが、原典の桐壺巻の和歌九首は、「序章・桐壺」ではすべて省略されている。その中で更衣の一首のみが会話に書き換えられている。『源氏物語』の和歌は、翻訳や翻案においても原文通りに引用するのが主流であるが、「新源氏」においては、原典の和歌の約八割を省略し約二割を会話や手紙文に置き換えている<sup>⑩</sup>。「序章・桐壺」においてもこの「新源氏」と同じ方法がすでに用いられているのである。

さらに、詳細に比較すると、わずかながら原文にない加筆が見出せる。藤壺の若宮への思いの描写と、言葉である。

原文では、入内当初の藤壺が「切に隠れたまへど」とあり、帝が「な疎みたまひそ」「なめしとおぼさで、らうたくしたまへ」と光源氏を可愛がることを頼む。光源氏も藤壺に「心ざしを見えたてまつる」のであるが、しかし、藤壺の気持ちは描かれていない。桐壺帝の寵愛を受ける二人を世人は、「光君」と「かかやく日の宮」と呼ぶ。「序章・桐壺」では、「藤壺も、若宮を可愛いく思し召すようであった」と藤壺の思いを加筆している。さらに、帝の言葉を受けて、藤壺は光源氏に「わたくしと、あなたは母子だそうでございますよ。仲よくいたしましょうね」と話しかけるのである。

この藤壺の言葉は、「新源氏」の「生きすだま飛ぶ闇の夕顔の巻」においても使われている。光源氏が藤壺との出会いを回想する場面で、幼い頃にはじめて耳にした藤壺のやさしく甘い声、「これから仲よくいたしましょうね」という言葉を思い起こすのである。

「新源氏」では、藤壺への一途な恋心が募ってゆく光源氏の心様が原典以上に詳細に描かれる。さらに、原典には描かれない二人の最初の逢瀬の場面が、筆を尽くして描かれている<sup>⑪</sup>。いわば「新源氏」の独壇場ともいえるべき重要な場面の伏線ともいえる心情描写や、二人の関係の発端になる重要な台詞が、「序章・桐壺」において、すでに準備されていたことは、注目されるべきである。

さらに、比較表中で、最も原文と相違があるのは、「序章・桐壺」の冒頭である。項目だけを見ても、原典の記述を再構成していることが明らかであるが、具体的に比較しておきたい。「序章・桐壺」の冒頭は、次のように書き始められている。

そのかたを、桐壺の更衣と申上げた。

父の大納言は亡くなっていられたが、母君は由緒ある家柄の出の方であった。娘の宮仕えにはいろいろ心を配って世話されていたが、何といっても、しっかりした後見人もいないこととて、何かにつけてお心細げでたよりないありさまだった。

あまたの女御、更衣が帝の周囲に花のように咲きみち、われおとらじときそっていられる後宮の、女の園の中で生きてゆくのは、心弱くてはかなわぬことだった。宮仕えは、更衣にとつて憂く、辛いことが多かった。

更衣はなやかな、けだかい美女だった。

お気立でもおだやかにやさしく、こまやかなお心がらのかたでいらした。——帝は、ひとめ更衣をこらんになって以来、

烈しい恋に落ちられた。

帝はもう、更衣を日も夜も離すことはおできになれなかった。後宮の他の女人たちをかえりみもされぬばかりか、大切なまつりごとさえ、おろそかにされていった。それは宮中の人々の非難とそしりを招かずにはいない。

桐壺の巻でありながら、「いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひける中に」という原文・桐壺冒頭の一文は用いていないことに気づく。

原文で、桐壺に住む更衣だと明かされるのは、もっと後(表の4)である。更衣の呼び名ではなく、更衣が頻繁に帝に召されることを妬む妃たちが共謀して、通いの道を妨害する事件に関して、更衣の局が「桐壺」であったからだ、局の名称として明かされるのである。また、原文では、「やむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふ」と紹介されるが、更衣の美貌や性格および心中は描かれない。周囲の女人の嫉妬と宮人たちの非難にも妨げられない帝の寵愛の深さによって、更衣の魅力を想像するしかない。更衣の美貌は重病となり宮中を退出する際の様変わりした姿の描写に重ねて言及される。また、更衣の死後に人々が更衣の美貌と人柄を懐かしむ件に描かれるのである。

「序章・桐壺」は、最初に「そのかたを、桐壺の更衣と申し上げた」と、光源氏の母の呼び名を示し、更衣の両親、家柄と置かれていた状況を描き、宮中ででの心労に触れ、桐壺更衣の美貌と性格を

「なよやかな、けだかい美女」「お氣立てもおだやかにやさしく、こまやかなお心がらのかた」と描く。そのような女君であったから、「帝は、ひとめ更衣をこらんになって以来、烈しい恋に落ちられた」のである。この冒頭部分には、原文中の処々に書かれた更衣に関する記述―両親のことや、死後に人々が回想する桐壺更衣の面影―がまとめて書かれている。読者の脳裏に鮮やかに桐壺更衣のイメージが浮かぶために、である。「序章・桐壺」は、「新源氏」が光源氏のイメージを鮮明に提示して始めるのと同様の方法で書き起こされているのである。

以上、見てきたように「序章・桐壺」には、「新源氏」に発展する手法や文言の一致が見いだせる。そこで、「序章・桐壺」は、いかに吸収されたのか、あるいは、その方法はいかに発展するのか、「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」の結構の分析を通して、「新源氏」における原典を再構成する具体的な方法を探ってゆきたい。

#### (四) 「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」の結構

「新源氏」の各巻名は原典の巻名と巻の内容を説明する語句とかなっている。「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」が空蟬との恋が中心になっていることはいうまでもない。ただし、その内容・構成を、対応する原文によって見ると、次の五つに区分でき、桐壺、帚木、空蟬の三巻の記述を解体し巧みに再構成して創り上げられた巻であることがわかる。



(1) 帚木巻の冒頭部分の源氏の本性を語る古女房の言により、光源氏像を提示する。

(2) 桐壺巻の前半部分により、帝と更衣の熱愛から源氏の臣籍降下と元服までを描く。

(3) 帚木巻の後半部分により、方違え先の邸で人妻空蟬との無理強いの逢瀬を描く。

(4) 空蟬巻の全体により、空蟬に拒まれて悩み嘆く源氏を描く。

(5) 帚木巻の前半いわゆる「雨夜の品定め」から頭中将との親交と女性論の一部のみ用いて、宮中の宿直所での光源氏と頭中将とが会話する場面で終わる。

まず、巻名についてであるが、「空蟬」の巻名に、次の原文・空蟬巻頭の語句「寝られたまはぬ」と、光源氏が空蟬と契った時節「夏の夜」による説明を付している。

【原文・空蟬冒頭】

寝られたまはぬままには、「われは、かく人に憎まれてもな  
らはぬを、今宵なむ、はじめて憂しと世を思ひ知りぬれば、は  
づかしくて、ながらふまじくこそ、思ひなりぬれ」などのたま  
へば、涙をさへこぼして臥したり。

巻名からも空蟬との恋を描く巻であり、空蟬の巻の翻案であることは明らかであるが、しかし、「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」の冒

頭「光源氏、光源氏と世上の人々は云々」は、明らかに上記の空蟬巻の冒頭とは異なっている。(1)に記したように、「光源氏」で始まる帚木巻冒頭である。

【原文・帚木冒頭】

光源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすきごとどもを、末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひけるかくろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさま。さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかききことはなくて、交野の少将には笑はれたまひけむかし。

世間では好色者との噂が語り継がれているが、実際は、光源氏は世間の非難を受けないように用心してまじめな風でいられたから、多情で有名な「交野の少将」には笑止と思われるほど、奔放な色恋沙汰はなかったという。この帚木冒頭に描く光源氏のイメージをもつて、「新源氏」の青年光源氏像は形象されている。「新源氏」の冒頭を再掲しておこう。

【眠られぬ夏の夜の空蟬の巻】

光源氏、光源氏と、世上の人々はことごとしいあだ名をつけ、浮わつた色ごみの公達、とめてはやすのを、当の源氏自身はあじけないことに思っている。

彼は真実のところ、まめやかでまじめな心持の青年である。

世間ふつうの好色者のように、あちらこちらでありふれた色恋沙汰に日をつぶすようなことはない。

帝の御子という身分がらや、中将という官位、それに、左大臣の思惑もあるし、軽率な浮かれごととつっしんで書いた。左大臣は、源氏の北の方、葵の上の父である。源氏は人の口の端にあからさまに取り沙汰されることを用心していた。この青年は恰好で、心ざまが深かった。

「新源氏」は、主人公・光源氏の登場によって物語が始まる。「ごととしいあだ名」は「名のみこととしう」に対応する。「光源氏」という呼び名を繰り返すことで、方々で光源氏の噂されている状況を暗示し、光源氏の当惑を記している。「色好み」という噂に反して、実は…と、光源氏の実像を語りだす。とくに、「軽率な浮かれごととつっしんで書いた」、「彼は真実のところ、まめやかでまじめな心持の青年である」と、世上の噂とは異なる光源氏像を提示している。この部分も帚木巻の「さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて」に対応する。さらに、「世を憚る理由」を加筆して、世間の噂に反して、人目を憚る気質の誠実で心優しい青年光源氏のイメージを提示するのである。

このように、冒頭を帚木巻によって始めているという一事からしても、「新源氏」が桐壺と帚木の巻を省略して空蟬の巻から始めた、

という簡単な構成ではないことがわかる。

田辺聖子が、桐壺と帚木の巻をどのように捉えていたかを知る必要がある。田辺聖子は『源氏物語』をめぐる数多のエッセイを書いているが、その中に「新源氏」の執筆体験を交えて『源氏物語』の魅力を語った『源氏紙風船』がある。初出は、雑誌『新潮』昭和四年八月号から五六年五月号に連載されたもので、「新源氏」の連載が終了した（昭和五年一月）、翌年に書き始められたエッセイである。「新源氏」の冒頭については「まことに横着な私は『新源氏物語』を書くときに『桐壺』の巻は省略してしまった」と記している。桐壺の巻は「古い馴れた平板な叙述がつづいて、退屈な巻」といい、「冒頭はやくも颯爽たる恋の狩人として、源氏を登場させたかった」ともいう。

桐壺巻では、母と祖母に死別した幼児期から十二歳で元服して妻を迎え藤壺への淡い恋心に悩む少年期の源氏の成長が描かれる。帚木巻では、突如「驕慢で放縦で、女を扱い馴れた」、「十七歳の恋多き青年貴公子」光源氏が、方違え先で人妻の空蟬に迫る恋愛事件が描かれる。主人公光源氏が「なま身の体軀」をもって動き出すのが帚木巻だという。

とはいえ、桐壺の巻について「一大長編のプロローグとしてなくてはかなわぬ巻」であるとも書いている。光源氏の幼年期、ことに母との死別や藤壺との出会いは、物語の展開上に欠かせない重要なエピソードである。その理解が、「序章・桐壺」を書かしたのであろう。「新源氏」を構想するにあたり、桐壺巻で始める試案もあつ

たことが、前章で取り上げた「序章・桐壺」によって明らかになったのである。

しかし、前述のごとく「序章・桐壺」においても「いづれの御時にか……」という原文の冒頭では始めず、桐壺更衣の人物像を提示していた。その方法を、「新源氏」全体の構想の中で徹底するために、すなわち、物語の主人公光源氏を冒頭から登場させるために「序章・桐壺」は削除されたと考えられる。そして(2)にまためたように、桐壺の巻に描かれた両親の悲恋と光源氏の生い立ちが「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」に組み込まれている。

(2)では、光源氏の「その詩的な生いたち―帝と亡き桐壺の更衣との悲恋によって生まれ、物心もつかぬまに、母に死に別れたという薄幸な運命」として、桐壺巻の内容が簡潔に圧縮されて記されている。注目すべきは、藤壺との出会いが省略されていることである。藤壺への思慕は、相手を明かさずに「心の底に苦しい恋を秘めている」と、暗示的に書かれるのみである。

原文・桐壺巻の内容を、「新源氏」では光源氏の人物像を形象する背景、比類ない才能と美貌の持ち主光源氏の過去として描いている。すなわち帚木冒頭において語られる「すぎごとども」や「かくろへごと」が語り継がれ噂になる背景として、光源氏の両親の悲恋と生い立ちを組み入れるのである。桐壺巻の内容を略叙した後に続くのは次の一節である。

源氏には、ほかの人間にない陰影があるというのは、その過

去のせいである。

生い立ちにある、父と母の情熱の火照りがいまも彼の身のまわりにゆらめいている。彼が身じろぎするたびに、妖しいゆらめきが放たれる。人はそれに酔わされ、魅惑される。

ことに彼の匂うような美青年ぶりは、ほんの一挙手一投足でも、らちもない噂をさざ波のように走らせずにはおかない。

原文・桐壺巻を省略したのではなく、光源氏という人物像に「陰影」を付与するために、大幅に簡略にして用いているのである。「新源氏」が巧妙に原文を再構築していることがわかる。

(3)と(4)は帚木と空蟬の巻にわたって描かれる人妻空蟬との恋の顛末を一巻にまとめている。一七歳の青年源氏の大胆で衝撃的な人妻空蟬との恋愛事件、傲慢でありつつも苦悩する光源氏を描き出すのである。

(3)では、帚木巻の冒頭部分にいう、屈折した恋に心をそられる光源氏の「さるまじき御ふるまひ」を前置きとして、帚木後半に描かれる紀伊守邸への方違えに端を発する人妻空蟬との恋を描く。大筋では、原文・帚木の後半の流れに沿っている。相違するのは、原文では源氏は紀伊守邸には三度訪れていて、一、二度は方違え、三度目は紀伊守の留守を狙って小君の手引きにより空蟬に逢いに行くのであるが、「新源氏」では二度にまとめている点である。また、光源氏と空蟬の恋の顛末を描く帚木後半においては五首の和歌が詠じられている。光源氏が無理強いに空蟬と契った翌朝に二人が贈答

した歌二首。その後、空蟬に贈った光源氏の歌一首。二度目の来訪時には空蟬との逢瀬が叶わずに帰宅した源氏と空蟬が贈答した歌二首の合計五首である。ところが、二人の贈答歌(四首)は、和歌も和歌が贈答されたことも記されていない。また、光源氏が小君に託して空蟬に届けた三首目の和歌も、「源氏の手紙をことづかって、姉の所へいった」と、「手紙」とのみ記される。和歌の贈答が行われたことは書かれてはいない。

(4) は、ほぼ原文・空蟬の巻の流れに沿っている。二度目の方違えの折に、空蟬は寝所に忍んで来た光源氏に気づき、小桂をのこして逃れる出来事が描かれる。逢えないまま自邸に戻った光源氏は小君を相手に恨み言を言い、空蟬への和歌一首を託すのである。

前述したように、原文の和歌は省略されたり、あるいは会話に書き換えることが行われているが、この一首「空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」だけは原文通りに引用されている。「空蟬」の歌語を詠み込んだ歌であり、巻名由来の和歌でもあるためであろう。因みに、原文・空蟬巻には、もう一首、空蟬が手習いに書きつけた古歌もあるが、この一首も省略されている。(5) では、帚木巻の前半部分「雨夜の品定め」の前後の箇所、すなわち、宮中の宿直所で、光源氏の恋文を見た頭の中將の女性論と様々な女性談義の最後に中流の女性の魅力を語る中將の話聞きつつ源氏は空蟬との恋を思い返す、という場面で「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」は終わるのである。

原文・帚木巻前半に描かれる五月雨の夜に源氏と親友たちが興じ

る女性談義、いわゆる「雨夜の品定め」は、「新源氏」の第二巻「生きすだま飛ぶ闇の夕顔の巻」に活かされることになる。

以上、「新源氏」の首巻「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」の内容を原文と比較することを通して、原文『源氏物語』を再構築する方法を探った。

## (五) おわりに

「新源氏」を構想する過程において執筆されたと考えられる資料「序章・桐壺」について原文・桐壺の巻と比較・考察した結果、「序章・桐壺」が原典を巧妙に再構築していることが明らかになった。ことに「桐壺」の巻でありながら、原文・桐壺巻の冒頭一文を用いていない点は、「新源氏」の冒頭と同様である点が注目される。冒頭で「桐壺の更衣」と呼び、その容姿と性格を描くことで、明確な女君を形象し登場させている点も、「新源氏」の冒頭を、主人公の「光源氏」の呼び名で始めるのと同様の手法である。原文では登場人物に関する描写を、会話に書き換えるという手法や和歌の扱いにも「新源氏」に見られる手法が用いられている。

また、「新源氏」の首巻「眠られぬ夜の空蟬の巻」と原文・空蟬巻とを比較すると、原典の桐壺、帚木の二巻を解体し組み入れて再構築する方法が明らかになった。「新源氏」の首巻「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」における原典再構築の具体相を見ると、その方法には「序章・桐壺」と共通する点を見出せた。

「新源氏」は、「序章・桐壺」における原文・桐壺の巻の再構築の

方法を発展させたと考えられる。前述の如く、田辺聖子は「新源氏」の創作方法について、原典を「うんと噛みくだき、その美しき細片をひろく敷きつめちりばめてしまおう」と記しているが、その方法は「序章・桐壺」においてもすでに試みられていたのである。

最終的に「序章・桐壺」を用いなかったことで、作品としての「新源氏」の画期性はより鮮明となった。「新源氏」における独創的な原典再構築の方法を端的に示す「序章・桐壺」は、「新源氏」の成立過程に関わる貴重な資料である。

#### 注

- (1) 立石和弘『源氏物語』の現代語訳（『源氏文化の時空』森話社）による。以下の立石氏の説の引用もすべて同書による。
- (2) 『鉄幹晶子全集8』（勉誠出版）所収の『新訳源氏物語』下巻 二のあとがき「新訳源氏物語の後に」中に記されている。
- (3) 一九三八年一月に記された「序」、『潤一郎譯源氏物語』（中央公論社）所収による。
- (4) 田辺聖子「恋の曼陀羅―恋する人は黙りがち 罪ある人はよく笑う……」『田辺聖子全集8』（集英社）所収の『新源氏物語』解説による。
- (5) 『源氏紙風船』、『田辺聖子全集15』（集英社）所収による。
- (6) 拙稿『新源氏物語』の挑戦―和歌の扱いをめぐって―（『樟蔭国文学』第46号、二〇〇九年三月）で論じた。論旨の都合上、本稿と一部重なるところがある。

(7) 『源氏物語』の引用本文は『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社）による。以下の引用も同書による。

(8) 『新源氏物語』の引用本文は『田辺聖子全集7』（集英社）による。以下の『新源氏物語』の引用も全て同書による。

(9) 北村結花「夢見る頃を過ぎても―田辺聖子『新源氏物語』論―」（『国際文化学研究』14、二〇〇〇年一月）に田辺聖子の『新源氏物語』を「翻訳史のビッグバン」と位置付けている。

(10) 拙稿『源氏物語』の現代語訳における和歌の翻訳―与野野晶子から田辺聖子へ―（全国大学国語国文学会『文学・語学』第202号、二〇二二年三月）でも言及した。

(11) 因みに、光源氏の継母藤壺への幼い憧れが次第に暗い恋情に変わる心情の変化、原典にない最初の密会の場面は、「生きすだま飛ぶ闇の夕顔の巻」に大胆な想像を交えて創作加筆されている。

(12) 注5と同書による。以下の桐壺と帚木の巻に関する言及もすべて同書による。

本論中に取り上げた田辺家より寄託された資料「序章・桐壺」（田辺聖子自筆原稿）を翻字して掲載する。

貴重な資料「序章・桐壺」の公開をご許可くださった田辺聖子氏のご遺族に深謝申し上げます。

## 「序章・桐壺」（翻字）

【凡例】

①本文中の旧字体の漢字や略字は、新字体や現行の字体に直した。

（例）「數」↓「数」

②挿入記号等を用いて補入、修正された箇所については、訂正後の文章を翻字した。

③原稿用紙の改頁は、頁の最終行末に「┘」を付して示した。

## 序章・桐壺

### 田辺聖子

「そのかたを、桐壺の更衣と申上げた。

父の大納言は亡くなっていられたが、母君は由緒ある家柄の出の方であった。娘の宮仕えにはいろいろ心を配って世話されていたが、何といっても、しっかりした後見人もいないこととて、何かについてお心細いで、たよりないありさまだった。

あまたの女御、更衣が帝の周囲に花のように咲きみち、われおとらじときそっていられる後宮の、女の園の中で生きてゆくのは、心弱くてはかなわぬことだった。宮仕えは、更衣にとって憂く、辛いことが多かった。

更衣はなやかな、けだかい美女だった。

お気立てもおだやかにやさしく、こまやかなお心がらのかたでいらした。——帝は、ひとめ更衣をこらんになって以来、烈しい恋に落ちられた。／

帝はもう、更衣を日も夜も離すことはおできになれなかった。後宮の他の女人たちをかえりみもされぬばかりか、大切なまつりごとさえ、おろさかにされていった。それは宮中の人々の非難とそしりを招かずはいない。

かの唐土の玄宗皇帝と楊貴妃の故事などもち出し、更衣は、国を傾むける元兇であるかのような、まがまがしい噂がまきちらされていった。

帝にかえりみられぬ女御たちのそねみと恨みは深かった。殊に、すでに一の宮を儲けておられ、帝ともっとも早く結婚された弘徽殿の女御のお憎しみはただならぬものがある。

更衣がお召しによって、帝のお住まいになる清涼殿に上られるときは、打橋・渡殿の通り道に、何ものの仕業か、不浄なものをまきちらして、お供をする女房たちの着物の裾が汚れてしまうような、意地わるい仕打ちをした。

また、馬道の戸の錠をしてこちらとあちら／で心を合せて、更衣たちをとじこめ、辱かしめたり困らせたりして、いじめるのだった。更衣は数えきれぬ、辛い仕打ちに思いなやみ、いつも沈みがちだった。おとなしい人柄の方なので、女人たちの暗黙の憎悪や嫉妬のほむらに焼きたてられ、反駁もおできになれず、やつれていかれた。

病いがちに、

「里へお帰し下さいまし……」

と涙ぐみながら訴えられるのが、かえって帝はふびんで、いとおしく、物狂おしいまで恋心を募らせられるのであった。

前世のちぎりが深かったのか、玉のように清らかに美しい男皇子がお生まれになった。

帝のお喜びと愛着はひと通りでない。三歳の袴着の儀式も、一の御子のときに劣らず、結構におあげになった。このみこは、見ても飽かぬ美しく、かわいい方だった。帝は、御子を儲けられてから、更衣を御息所みよすんどろとして重く待遇されたので、女人たちの迫害はますます陰にこもって烈しくなり、御息所を悩ませた。／

その年の夏、御息所はふとした病いが、そのまま重くなっていかれた。実家へ帰って養生したいと願われたが、帝は、いつもの軽い疲れと、お聞き入れにならない。そのうち、ほんの五六日のあいだに、ますます衰弱してしまわれたので、母君が泣く泣くお願いしてやっと連れ帰られることになった。

帝は心もとなく思し召されて、お手もとから放ちがたかった。匂うように美しいひとが、急速にやつれ面痩せ、言葉もなく消え入る様子でいられるのを帝はごらんになって、不吉な胸さわぎを感じられた。これはどうしたこと、なぜこころ弱ったかと、過去も未来も一瞬かきくられるように、お心は暗くなった。

「どっさらされたのだ、あなたはまた……。いいか、おぼえているね、天に在っては比翼の鳥、地に在っては連理の枝、と互いに契った仲

ではないか。よみ路への旅ももろともに、と誓い合ったのを忘れはすまい……。私を捨ててひとりでゆくことはできないはずだ」／

御息所はかきくどかれる帝のお言葉に、返事もできず、まぶたも重げに、なよなよと弱っていらした。純粹にひたむきな、お若い帝の恋慕に、御息所は身も心も、色濃く染められた。しかし、お心のうちでは、これが今生の別れではないかと悲しい予感があった。

「限りある人のいのちでございませす……。でも、あたくしは、生きとうございませす」

と息もたえだえに、まだ言いたそうにしていられるが、もはやつづかない。帝は、おん腕に抱きしめて、同じことなら、このまま手もとに置いてみとりたいと思われたが、祈禱をする僧が集まっておりますというので、やむなく、退出を許された。

帝は、不安と悲しみで眠ることがおできになれない。実家へ出されたお使いは、御息所の死をもたらして立ちかえってきた。帝はお胸もふたぎ、心もくれまどうて、引きこもってしまわれた。

里の母君は、娘を焼く煙と共に消えてしま／いたいと伏しまるんで泣かれた。

御息所の美しい亡骸は、愛宕で、灰になった。

はかなく、月日は過ぎてゆく。帝のお悲しみは、深まざるばかりである。

亡くなられてみれば、なおのこと、かの御息所の、やさしかったお心やり、愛らしいしぐさ、美しいおもぎしが、まなかいから離れられない。それに付けても、忘れがたみの御子は、祖母君のもとで

どうして過していられるのか、また、年よったかの母君も、いかばかり心細かろうと、帝は、野分の夜、鞆負の命婦という女房をおやりになった。

母君は、帝のお心づかいのあたたかさを思うにつけ、薄命だった娘を泣かすにはいられない。親の愚痴というものであろうか、ああまで帝がご寵愛にならなかつたら、こんな運命にもめぐりあわず、命をちぢめることもなかつたのではあるまいかと、かえってうらめしく思ったりするのであった。／

わずかの間にむぐらの宿になって荒れはてていた御息所の里のありさまなど、命婦は帝に奏上する。涙ぐまれている帝の耳に、弘徽殿の女御の方で、管絃のあそびをしていられるのがきこえた。弘徽殿の女御はお心持ちの剛い方で、帝のご傷心を思いやるというような優しみはないのである。

若宮が六つの年、祖母君が亡くなられた。そのちはもうずっと、内裏にお住まいになる。

耀やくようにお美しく、才能もおありになり、学問を学びはじめられると、たぐいもなく俊敏である。琴も笛も、たいへん筋がよい。高麗人の人相見が来朝していたので、帝は身分をかくしておやりになった。

相人は、おどろいて、「この若君は天子の位にのぼる相がおありだが、それではふさわしくない。国家の柱石というところかといえ、またちがうようです」と首を傾むけた。帝はそれを聞かれて、心中ふかく考えられるところがあった。ほんとうは若宮をこそ皇

太子にと思召されたのだが、それはかえって不幸を招くであろう、臣籍に降下させ、源氏を名乗らせて帝の輔佐者としようと決心されたのだった。

そのころ、先帝の女四の宮が、亡き桐壺の御息所によく似ていらっしゃるとい噂をする人があった。

帝はその姫宮の内を熱望された。母宮は、

「弘徽殿の女御が意地わるなために、更衣がいじめぬかれて亡くなられたではありませんか」

と反対されたが、そのあと、病いでみまかられた。

姫宮はひとりのこされ、人々のすすめによって入内されることになった。

藤壺と申上げた。ふしぎなほど、亡くなられた御息所に似ていらして、帝のお心を動かした。若々しく、お美しく、しかも、このたびの女御は、ご身分が高いので、どなたも粗略に扱うことはおできにされない。帝のご寵／愛もひとかたでなく、たちまち、時めきたまう方になった。

桐壺の御息所をお忘れになったというのではないが、人の心は時がたてば、いつかうつろい、かわってゆく。おのずからなるうごきであって、責めるべきではないが、これも人の世のあわれ、というものである。

若宮は、父帝がおそば去らずに愛していられる。藤壺へお渡りになるときも、むろん、伴なわれるのだった。

「この子の母はふしぎに、あなたによく似通っていました。目も



と、類など、この子は母によく似ているので、あなたとは実の母子のようにみえますよ。可愛がってやって下さい」

と帝は微笑していわれるのだった。——若君は、愛らしい美少年で、鬼のような人間でさえ、この君をみたら笑みを泛べずにはいられぬだろうと思われる位だったから、御所中の人気ものであった。／

「藤壺も、若宮を可愛いく思ひ召すようであった。

「わたくしと、あなたは母子だそうでございますよ。仲よくいたしましうね」

と、御簾みすだのうちにもお入れになって、やさしく話しかけられた。

藤壺はあでやかに教養ふかいかたでいらして、そのお美しさは並ぶものなく、「耀く日の宮」と世人はお呼びした。

若宮の源氏の君は、これまた、玉のように美しいというので「光る君」とよばれた。

源氏は亡き母君のおもかげを、おぼえていない。

三つのとしに別れた母君は美しいなやかな人だったと聞いている。その母に生き写しだという藤壺に、あこがれとあわい恋心を抱かずにはいられない。藤壺のおそばに寄り、かぐわしい薫かほりを身にうけて、やさしい言葉が佳き人の唇から洩れるのを聞くと、源氏は天上に遊ぶような、たのしい思いに身を任せる。帝も、世に二人とない美少年と、美女のむつまじい仲らいを喜んでいらした。

しかし、源氏が十二で元服し、一個の男として独立する晴れのよろこびの日は、また、あこがれの女人・藤壺の宮への袂別の日でも

あった。元服すれば、もう成人男子として、後宮の奥ふかい御簾の中へは、足を踏み入れることはできない。

そうして、別の人生が、彼には用意されていた。

元服の儀式は盛大で、善美を極めた。加冠の役は左大臣で、左大臣のひとり娘の姫君と結婚することになった。姫君は源氏の君よりお年上であった。母君は、帝のごきょうだいで、身分からいっても重々しいりっぱなお家柄である。美しくて端正な方だが、源氏はうちとけられない。彼の見たい人はこの姫君ではない。

人にいえぬ思慕は、源氏の心の中にしたたりおち、重く、暗く、たまって深淵となってゆく。かの佳き人への想いは歳月とともに深くなってゆくばかりであった。／